



Title	特集にあたって：「社会学共創」への共創的アプローチ
Author(s)	徳永，恵美香；伊藤，莉央
Citation	未来共創. 2025, 12, p. 77-81
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/102520">https://hdl.handle.net/11094/102520</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 特集にあたって——「社会学共創」への共創的アプローチ

徳永 恵美香

大阪大学大学院人間科学研究科・大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター

伊藤 莉央

大阪大学大学院人間科学研究科・大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター

## 1. はじめに

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センターでは、毎年テーマを1つ選び研究会を実施している。2024年度は「社会学共創」をテーマに設定し、政策と現場、大学と現場という点に焦点を当てつつ、「社会学共創」とは何かを探ることを目的として、計3回の研究会を開催した。

「社会学共創」とは何だろうか。「社」は何を意味し、「学」は何を意味するのか。「社」は社会だけを指すか。それとも、「社会」を構成する個々の人を指すのだろうか。「学」は大学のみではなく、より広範に大学以外の学校をも含めて考える必要があるのだろうか。これらの疑問に答えることは難しいが、「社」と「学」の間で「共創」し、大学と現場をつなぐ活動や実践は多種多様に存在する。「社会学共創」の意味や内容を探るために、さまざまな実践を知り、それらから学ぶことは大いに意味のあることである。まず、そこから「社会学共創」への学びを始めたいと思う。

## 2. 「社会学共創」とは何か

「社会学共創」に関して、大阪大学の取り組みの中のいくつか事例を紹介する。大阪大学では、2024年4月から人文社会科学系オナー大学院プログラム（博士課程の学生対象）を開始した。同プログラムは、大阪大学の双翼型大学院教育システムの理念の下で、知と知の融合と、社会と知の統合の両翼を指向し、人文社会科学系部局の連携のもとに運営される<sup>1</sup>。履修生は自身の専門分野の学びを深めるプロセスと並行して、異なる人文社会科学の研究分野の知見や、社会のさまざまな現場などで人文社会科学の実践を学ぶ。これによって、同プログラムは、専門を深めるだけでは身につけることのできない、総合知と実践知を具えた高度な博士人材の育成を目指している<sup>2</sup>。

このプログラムの教育課程を編成するユニットの1つに「社会学共創」ユニットがある。同ユニットでは、「社会学共創」を「大学と社会が場を共有しつつ、新しい価値を創りだすこと」であると定義する<sup>3</sup>。すなわち、同プログラムでは「社会学」の「学」は大学を指し、また「社」は「社会」を指し、大学と社会がお互いに場を共有することによって、新たに価値を創造することを「社会学共創」と捉えているとも言える。大阪大学は「社会学共創」を通して「生きがいを育む社会」の創造を目指しており、このプログラム修了生には、その将来において、専門知に基づき、社会の未来について語り、社会と共に実践する役割が期待される<sup>4</sup>。

他方、未来共創センターの取り組みの1つに「IMPACT・オープンプロジェクト」がある。このプロジェクトは大阪大学に所属するすべての教員を対象とし、主催者となった教員が学外の団体と連携し社会学共創活動の展開を行う<sup>5</sup>。2023年度から「社会学共創活動を展開することにより、共生社会実現に向けての実践的な教育研究活動の強化を図る」というセンターの目的規定に沿って、プロジェクト主催の対象を大阪大学大学院人間科学研究科教員から全学に拡大し、取り組みが強化された<sup>6</sup>。プロジェクトには、「災害ボランティアラボ」、「緒方らぼ」、「MeWプロジェクト（月経をめぐるウェルビーイングの研究と実践）」、「多様性の中のウェルビーイング」、「復興まちづくりラボ——野田村」、

「生野区における多文化まちづくり活動における社会学共創プロジェクト」などがある。

また、未来共創センターでは、「大阪大学オムニサイト」(以下、OOS)がある。OOSは、共創知を生み出す「場」の創出を目指し、2017年4月に新たな共創の仕組みとして開始された<sup>7</sup>。OOSでは、大阪大学大学院人間科学研究科が企業・財団法人・社団法人・地方自治体・NPO/NGOなどと「OOS協定」を締結する。この協定締結により、産官社会学連携を強化し、学内外のセミナーやイベントの「場」とともに、各団体等の活動の「場」を支援し、それらによって支え合う社会や共生社会の創造を目指している<sup>8</sup>。

### 3. 本特集の構成

本特集は、1本の論文と1本の報告記録、そして1本の報告記録および座談会で構成されている。

学校教育を通じた「社会学共創」と「共生」—南アフリカ共和国のLife  
Orientationの教科書と指導書を事例に  
坂口真康

第2回テーマ研究会—実践から共創を考える—  
杉田映理 山田陽子

第3回テーマ研究会—共創と社会的評価—  
渥美公秀 今井貴代子 内山志保

坂口論文は、「社会学共創」とは何のために行うものであり誰のために行うものかを議論した第1回研究会での報告に基づく。坂口論文は南アフリカ共和国のLife Orientationの教科書と指導書を事例とし、学校教育を通じた「社会学共創」と「共生」について考察する。Life Orientationは「他者や社会に関係した自己に関する学業」だと定義される教科である。坂口論文は同教科の後期中等教育段階の10年生と11年生の任意の教科書と指導書の記述を詳細に分析し、

日本社会や国際協力における「社会学共創」や「共生」を議論する際にそれらから重要な示唆が得られると指摘する。

第2回テーマ研究会は実践から共創を考えることを目的として、大阪大学大学院人間科学研究科の杉田映理教授と山田陽子准教授にご報告いただいた。杉田映理教授からは、MeW Projectと社会学共創をテーマに、ご自身が主催者となっているIMPACTオープンプロジェクト「MeWプロジェクト（月経をめぐるウェルビーイングの研究と実践）」についてお話しいただいた。山田准教授からは「社会学共創」を考えるテーマに、ご自身が主催者となっているIMPACTオープンプロジェクト「多様性の中のウェルビーイング」での活動や、ご自身の労働者の自殺に関する社会学的研究、アーティストとのコラボレーションを通した学術的概念の社会的共有と発信などについてお話しいただいた。

第3回テーマ研究会は共創と社会的評価をテーマとして、大阪大学大学院人間科学研究科の渥美公秀教授、今井貴代子特任講師、内山志保特任研究員にそれぞれご報告いただいた。渥美教授からは、2023年度から同研究科において開始された「IMPACTプロジェクト」の概要とともに、ご自身が主催者を務めるIMPACTオープンプロジェクト「復興まちづくりラボ—野田村」などについてお話しいただいた。今井特任講師から人文社会科学における社会的インパクトの概要と課題についてお話しいただき、内山特任研究員からは2024年12月に実施したエディンバラ大学での調査の概要についてご報告いただいた。また、本稿では報告後のフリーディスカッションの記録も記載している。

この特集で鮮やかに描き出される「社会学共創」に関する議論や実践が、大学と現場をつなぐ一助となることを期待したい。

## 注

- 1 人文社会科学系オナー大学院プログラム「About」<https://www.hsshonor.osaka-u.ac.jp/about> (2025/3/17アクセス)

- 2 同上。
- 3 人文社会科学系オーナー大学院プログラム「社会学共創 ユニット」<https://www.hsshonor.osaka-u.ac.jp/socialcocreationunit>（2025/3/17アクセス）
- 4 同上。
- 5 大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター「IMPACT・オープンプロジェクト」<https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/ja/openproject/>（2025/3/17アクセス）
- 6 同上。
- 7 大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター「大阪大学オムニサイト」<https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/ja/omnisite/>（2025/3/17アクセス）
- 8 同上。